平成25年6月21日（金）
文　化　財　課
担当者　安（やす）
内　線　５６２５
直　通　225-1844

国史跡の追加指定等について

１　国の文化審議会（会長　宮田（みやた）　亮平（りょうへい））は、平成２５年６月２１日（金）に、史跡和田山（わだやま）・末寺山古墳群（まつじやまこふんぐん）と史跡秋常山古墳群（あきつねやまこふんぐん）に、寺井山古墳群（てらいやまこふんぐん）と西山古墳群（にしやまこふんぐん）を追加指定して統合し、名称を能美古墳群（のみこふんぐん）（寺井山古墳群、和田山古墳群、末寺山古墳群、秋常山古墳群、西山古墳群）に変更するよう、文部科学大臣に答申した。

２　能美古墳群では、南北１ｋｍ、東西２ｋｍの範囲に、ほぼ古墳時代をとおして継続的に古墳が造られており、加賀における代表的な墳形、規模、埋葬施設、副葬品等を見ることができる。今回の追加指定等により、貴重な史跡として、価値が更に高まることとなる。

３　なお、答申どおりの追加指定等となれば、県内の国指定史跡・名勝・天然記念物件数は５０件（うち史跡は２４件）になる。

（参考）

〇能美古墳群

・国指定年月日	昭和５０年３月１８日（和田山・末寺山古墳群） 平成１１年１月１４日（秋常山古墳群） 平成１３年１月２９日（秋常山古墳群追加指定）
・名　　称	変更前　和田山・末寺山古墳群、秋常山古墳群 変更後　能美古墳群（寺井山古墳群、和田山古墳群、末寺山古墳群、秋常山古墳群、西山古墳群）
・所　在　地	既指定地　石川県能美市和田町ハ１番外２２７筆等 追加指定地　石川県能美市寺井町ま１５６番外１９３筆等
・指定面積	既指定面積　９３，０１７．４４㎡ 追加指定面積　４１，９２４．６１㎡ 合　計　１３４，９４２．０５㎡

「能　美　古　墳　群」

１　名　　称　能美古墳群
（寺井山古墳群・和田山古墳群・末寺山古墳群・秋常山古墳群・西山古墳群）

２　所 在 地　石川県能美市和田町ハ１番　外４２１筆等

３　指定面積　１３４，９４２．０５㎡
[既指定地面積]
・　史跡和田山・末寺山古墳群：７５，９２１．００㎡
・　史跡秋常山古墳群：１７，０９６．４４㎡
[追加指定地面積]
・　寺井山古墳群：５，１９１．００㎡
・　西山古墳群：３６，７３３．６１㎡

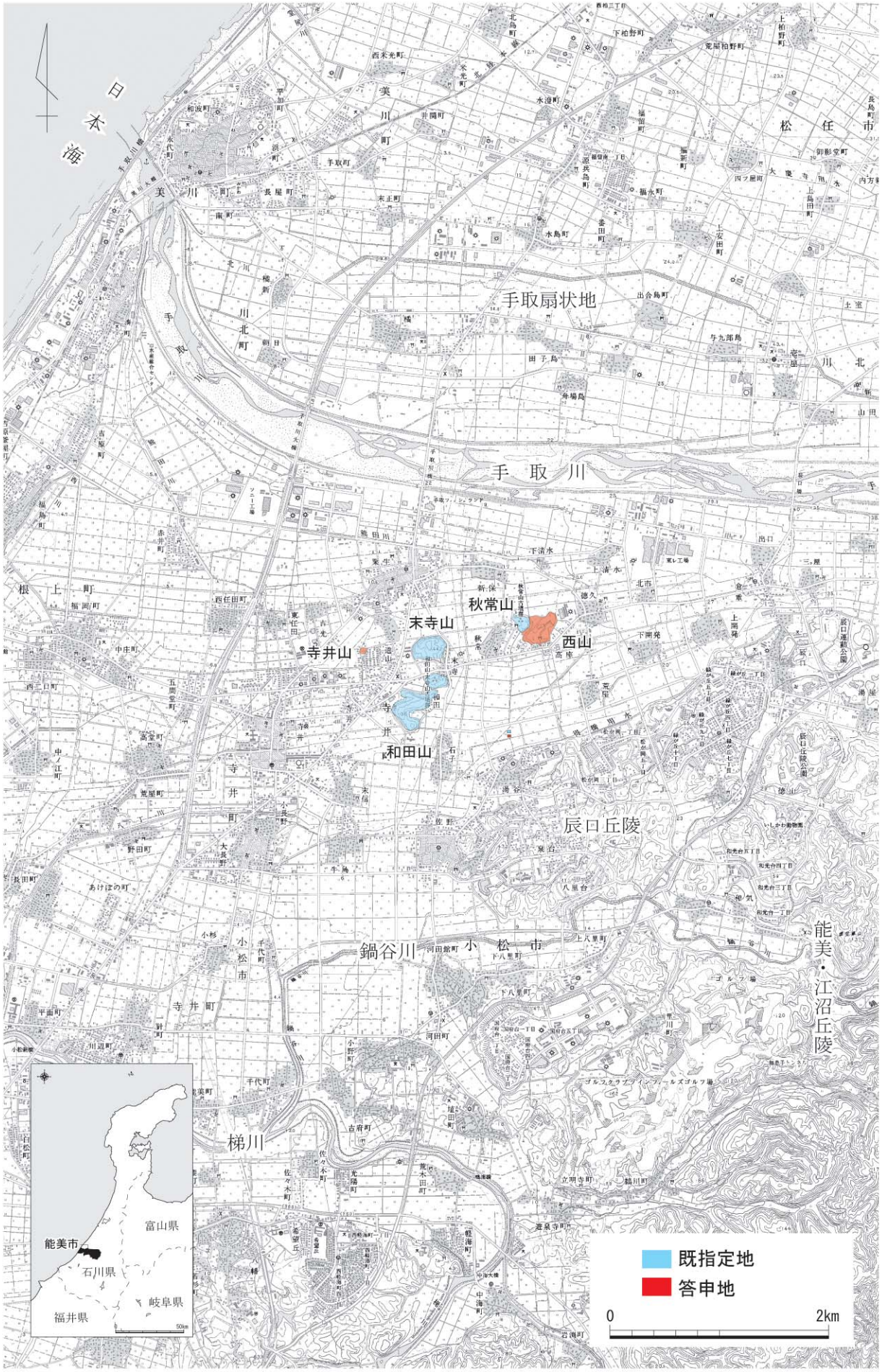
４　所 有 者　能美市、神社、町会、個人

５　概　　要

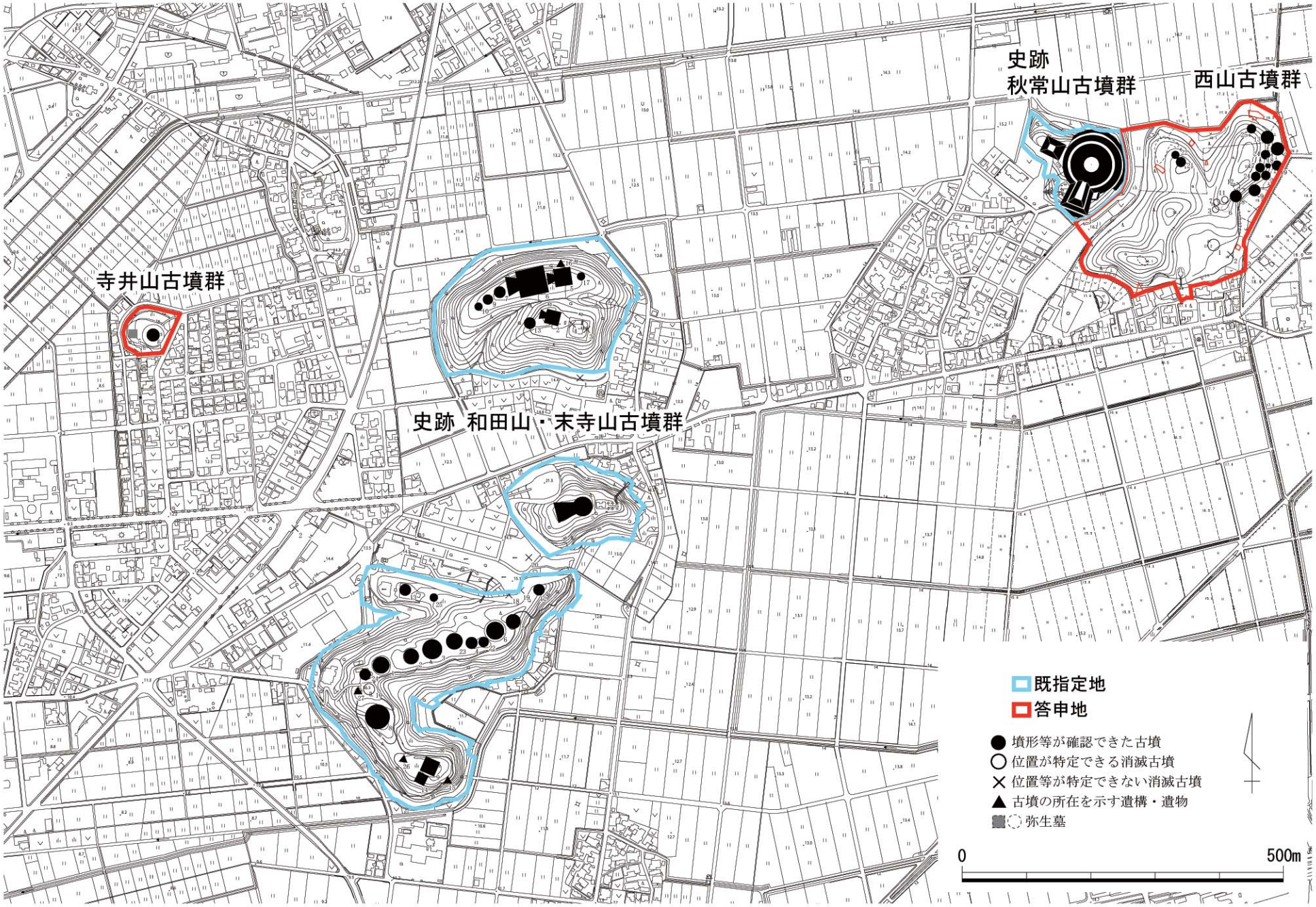
能美古墳群は、能美市内の平野部に点在する寺井山・和田山・末寺山・秋常山・西山の５つの独立丘陵上に造られた古墳群の総称である。各古墳群はそれぞれの丘陵名をとって呼称している。現在、62 基の古墳が見つかっており、前方後円墳、前方後方墳、円墳、方墳といった古墳の主要な形態が全てそろっているとともに、規模も最大 140mから最小 11mまでさまざまなものが見られる。

造られた時期は、３世紀から６世紀の古墳時代のほぼ全期間にわたり、この間、方墳・前方後方墳・前方後円墳・円墳へと主要な墳形の変遷を追うことができる。埋葬施設も木棺直葬、粘土槨、木造粘土被覆室（横穴式木室）、切石積横穴式石室など多彩で、出土遺物も多くあり、なかには六鈴鏡（和田山１号墳）、鈴付銅釧（和田山２号墳）、馬鐸･鈴付杏葉（西山 9 号墳）、基壇状に並べられた須恵器高杯群（和田山 23 号墳）など北陸においては希少な品々も含まれている。こうした諸特徴とともに、各時期には北陸最大級の前方後円墳である秋常山１号墳（墳長約 140m・４世紀末）をはじめ、寺井山６号墓（区画墓・３世紀）、末寺山６号墳（前方後方墳・墳長約 57m・４世紀前半）、和田山５号墳（前方後円墳・墳長約 55m・５世紀半ば）、西山８号墳（円墳・墳長約 20m・６世紀半ば）など、加賀地方を代表する有力墳が含まれており、能美古墳群は古墳時代に能美地域を治めた歴代の首長や有力者が眠る特別な墓域であったと考えられる。

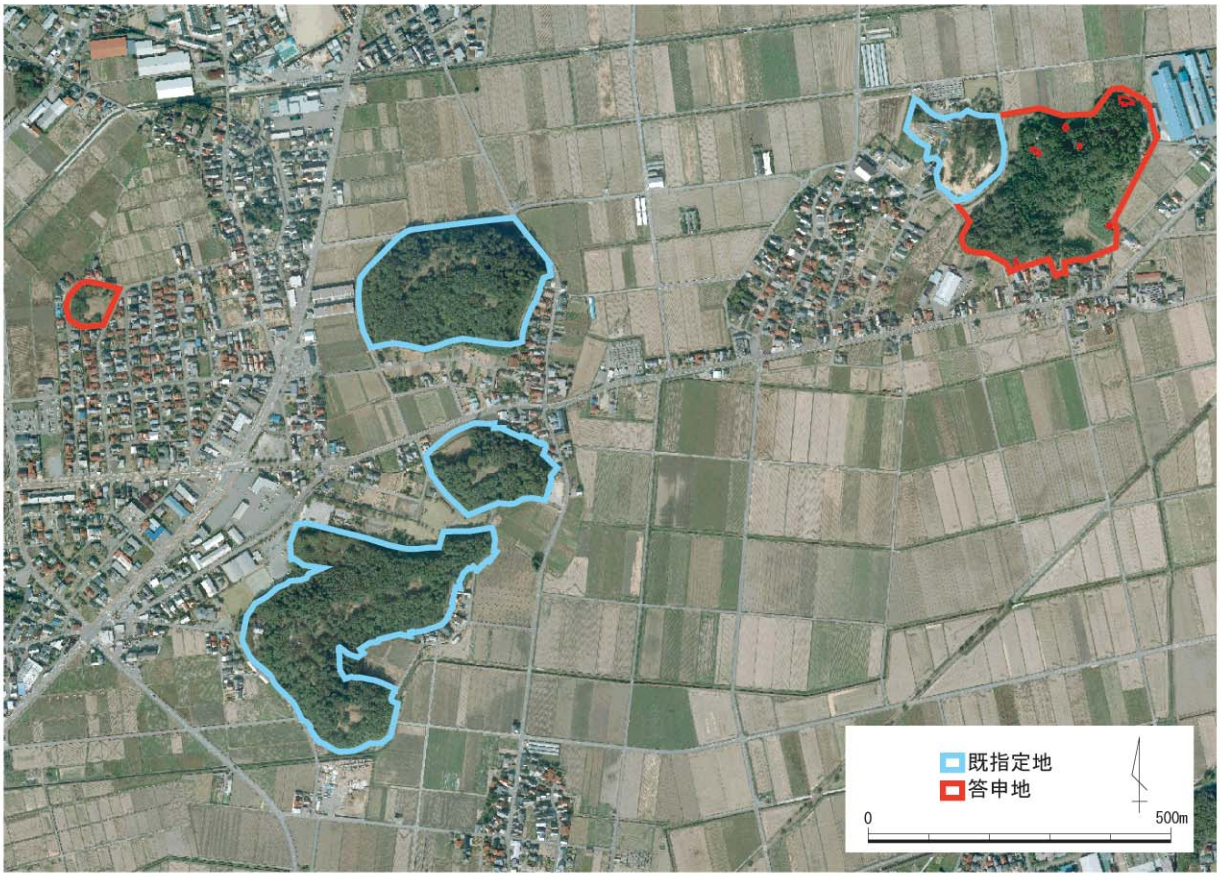
以上の特徴を有する古墳群は北陸においては稀有であり、一地域史のみならず日本列島における古墳時代の政治的動向、古墳文化の展開過程を知るうえでも極めて重要な古墳群として位置づけられる。よって、既存の国史跡である和田山・末寺山古墳群、秋常山古墳群に寺井山古墳群、西山古墳群を新たに追加し、「史跡 能美古墳群」として一体的な保護を図るものである。


日本海
手取扇状地
手取川
秋常山
末寺山
西山
寺井山
和田山
辰口丘陵
鍋谷川
梯川
能美・江沼丘陵
松任市
小松市
富山県
石川県
福井県
岐阜県
能美市
既指定地
答申地
0
2km

能美古墳群の位置


史跡
秋常山古墳群
西山古墳群
寺井山古墳群
史跡 和田山・末寺山古墳群
既指定地
答申地
墳形等が確認できた古墳
位置が特定できる消滅古墳
位置等が特定できない消滅古墳
古墳の所在を示す遺構・遺物
弥生墓
0
500m

能美古墳群指定範囲図



能美古墳群遠景（上空から）

能美古墳群遠景（南東から）

能美古墳群遠景（西から）

西山古墳群（東から）

参　考

用語解説

【古墳時代】日本で古墳がつくられた時代。弥生時代と飛鳥時代の間にあり、３世紀半ばから６世紀末までの約 350 年間の時代を指す。現在の奈良県や大阪府を中心とする地に「ヤマト政権」、「倭王権」とも呼ばれる政治的中央が成立し、全国各地の首長層を従属あるいは同盟関係に置き、その序列を巨大前方後円墳を頂点とする古墳の築造により視覚化した。

【古墳】土を盛ってつくったお墓。古墳時代につくられた墳丘をもつ墓に限定して用いられる。前方後円墳、前方後方墳、円墳、方墳を主とするさまざまな形があり、大きさも全長 400m以上から 10m未満まである。墳丘は葺石や埴輪などで飾られた。埋葬施設には被葬者の遺体とともに、被葬者が生前所有していたものや鏡・甲冑・馬具など王権から配布される威信財が副葬された。古墳は日本列島を治めた「大王」をはじめ、各地を治めた首長など限られた階層のみが葬られ、古墳の形態や規模、埋葬施設、副葬品などで王権との関係性が序列化される政治的記念物でもあった。

【木棺直葬（もっかんじきそう）】古墳の墳頂部などに墓坑を掘って、木棺を直接据え置き埋納する埋葬施設。竪穴式石室や横穴式石室のように石材等を用いて墓室空間を造らず、最も簡素な種類の埋葬施設である。能美古墳群では、和田山９号墳、末寺山５号墳、西山３号墳などに見られ、古墳時代の初頭から採用され、時期を経るにつれて階層的に低い被葬者の古墳で採用される傾向にある。

【粘土槨（ねんどかく）】古墳の墓坑に納めた木棺を粘土で包み覆った埋葬施設。木棺の保護や被葬者の霊威を封じる役割があったと考えられる。能美古墳群では、和田山５号墳、秋常山２号墳など有力墳に採用される傾向にある。

秋常山２号墳の粘土槨

【木造粘土被覆室（横穴式木室）（もくぞうねんどひふくしつ　よこあなしきもくしつ）】木柱と板材を骨組みとして墓室空間を造り、粘土で被覆して構築する埋葬施設。一般的に横穴式石室と同様に遺体を安置する玄室と外部と繋がる通路である羨道が設けられるが、羨道は省略される場合もある。北陸では６世紀以降の南加賀地方に分布が集中する。能美古墳群では、末寺山７号墳などに見られる。

【切石積横穴式石室（きりいしづみよこあなしきせきしつ）】加工した石材を積み上げて墓室空間を造り、外部につながる通路である羨道を設けることで追葬が可能となった埋葬施設。能美古墳群では、和田山６号墳、西山１・２・８・９号墳など６世紀以降の古墳で多く採用される。加賀地方でも能美古墳群に特に集

中する特徴がある。石室は凝灰岩を四角く加工し、さらに石材の隅角をＬ字状に掘り込んでかみ合わせることで強固なものとしている。西山８号墳の石室石材は大きいもので、幅２m×高さ 0.75m、重さ 1.65ｔを測る巨石で、有力墳のみに採用される埋葬施設である。

西山８号墳の切石積横穴式石室

【六鈴鏡（ろくれいきょう）】周縁に６つの鈴がついた古墳時代の青銅鏡。「鈴鏡」は５世紀後半から６世紀前半にかけて日本で製作され、古墳に副葬された。鈴の数は４鈴から 10 鈴のものまであるが、９鈴のものは発見されていない。現在、日本列島で 150 面程確認されており、関東や中部地方に分布が多く見られる。腰部に鈴鏡をぶら下げた巫女形埴輪があることから、神事などで用いられた道具と考えられている。能美古墳群では和田山１号墳に副葬されており、これは北陸唯一の出土である。

和田山１号墳の六鈴鏡

【鈴付銅釧（すずつきどうくしろ）】周縁に鈴がついた銅製の腕輪。５世紀後半から７世紀前半にかけて日本で製作され、古墳に副葬された。鈴の数は４鈴から 13 鈴のものまである。現在、日本列島で 60 例程確認されており、関東や東海地方に分布が多く見られる。鈴付銅釧を腕に装着する人物埴輪の特徴や、出土した古墳の内容から有力者の特別な装身具であったと考えられている。能美古墳群では和田山２号墳に副葬されており、北陸唯一の出土であるとともに、同じ型式のものは全国に６例しか見られない貴重な品である。

和田山２号墳の鈴付銅釧

【馬鐸（ばたく）】馬の飾り具の一種で、銅鐸の形に似た青銅製の鈴。馬の胸部分に３～５個程をぶら下げ、馬の歩みとともに音を出す。能美古墳群では西山９号墳に副葬されており、石川県内唯一の出土。

西山９号墳の馬鐸

【鈴付杏葉（すずつきぎょうよう）】「杏葉」とは馬具の一種で、馬の胸部や尻部に下げて装飾とした。剣菱形、ハート形、棘葉形などさまざまな形態のものがあり、素材も青銅製、鉄製、鉄地金銅張製など多様である。鈴付杏葉は、周縁に鈴を付けた杏葉の一形態で６世紀前半を中心に日本で製作された。能美古墳群では、西山９号墳に副葬されており、石川県内では羽咋市の滝３号墳と合わせて２つの古墳からしか出土してない。

西山９号墳の鈴付杏葉

【須恵器高杯群（すえきたかつきぐん）】「須恵器」とは５世紀以降、日本で生産された青灰色の焼物。朝鮮半島からロクロによる製作技術と窯を用いた高火度の焼成技術が伝わり、硬質の焼物として普及した。古墳時代には日常雑器であるとともに、古墳での祭具や副葬品としても多く用いられた。「高杯」は椀形の身に脚をもつ器種で、祭祀で用いられることが多い。

和田山 23 号墳の須恵器高杯群

能美古墳群の和田山 23 号墳では、45 個体もの高杯が周溝の底に基壇状に並べられていた。その上には壺や器台が乗せられており、古墳祭祀での祭壇として用いられたと推測される。こうした良好な出土状態は全国にも例が無く、須恵器を用いた古墳祭祀を知るうえで重要な資料である。